



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2015/02/02(月)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 159

「第66回全日本大学バスケットボール選手権大会」での学び

北翔大学
横山 茜理

1月24日～30日の日程で女子は大田区総合体育館、男子は代々木第二体育館を中心に4会場で開催されました。

北海道は男女2チームずつ出場し、残念ながら初戦敗退に終わってしまいました。今回は女子の試合を通じて感じたことを述べていきたいと思います。

〈全国レベルとの差〉

私自身学生時代は、この大会で優勝を目指し4年間バスケットに捧げてきた記憶があります。それと同じように各ブロックの代表は、激しいリーグ戦を戦って出場権を獲したチームであり、頂点を目指す強豪が揃うなかで全国レベルと北海道との差は、現状大きくあります。サイズ・経験・パワー全てにおいて劣っているのは、時間のかかる課題だと感じました。しかし、それは北海道だけの問題ではなく、関東・関西・東海・九州をのぞく各ブロックの出場チーム全てに当てはまる課題ではないかと受け取れました。

関東では東京医療保健大学や山梨学院大学、九州では西南女学院大学など近年、力をつけてきたチームが多く見受けられ、その中でも東京医療保健大学は、急速に力をつけて今大会でも三位という成績を残しています。山梨学院大は一回戦敗退したものの名門、愛知学泉大学と激しい攻防を繰り広げ戦っていました。西南女学院大学は、昨年に続きベスト8に名を連ね今年は6位と昨年より上位になっています。

〈北海道女子に求められること〉

さて、北海道の話に戻しましょう。

まずはじめに、言いたいことは「体の大きさや選手の高校時代の経験がなくても全国の舞台上で勝ち上がることは可能である」と期待を込めて述べておきます。しかしながら、それには監督、コーチの指導力、プラス選手のひらめき、対応能力が高く求められます。これを学んで成長していけるのが大学生の特徴ではないかと推察します。それは自ら学び、課題を克服しようとする。大学で学ぶということは強制ではありませんし、学びたい分野の学部学科に入学し、時間割も自分で決める。自ら学びを深める場なのです。

私もよく高校・大学時代から言われていた言葉があります。「土台をきちんとする」つまり、戦う準備を日頃から積み重ねて試合に臨むことができるかどうかで決まります。選手の可能性はゼロではなくやってみなければわからないのです。戦術、分析、経験これを学ばせるのはコーチであり学びを深めるには個人の努力次第だと言えます。

〈試合で学んだこと〉

今回、東京医療保健大学と試合をして感じたことは「小さくても闘える」ということです。確かに実力の差は大きいですが…誰だって、勝ちたい、上を目指したいと思うのは勝負の世界では当たり前のこと。小さいチームは、オールコートで激しいディフェン

ス・オフENSEをしなければいけません。多くの戦術や戦い方があると思いますが、私はそれしかないと考えています。

でもその激しいディフェンスやオフENSEをするためには、北海道の学生はもっともっと日頃の努力が必要です。相手との駆け引きや緩急を使った攻守を向上させること、サイズがなければ他で補うためにトレーニングすること、スピードがないならパワーで勝れるようにすること。

なにかひとつでも選手に武器を持たせ、それを磨き続ければ選手は自信を持ちます。さらに試合での経験が自信を確信に変え、チーム力があがると思います。

〈今後の課題〉

大会中に数試合上位の試合を観戦しました。

その中で、大阪体育大学対愛知学泉大学の試合は北海道の選手たちにとって、とても勉強になったと思います。愛知学泉大は、オールコートでディフェンスすることを得意とし、今期はエースの選手が得点源であり堅実なプレーが目立ちます。対する大阪体育大学は、5人全員でディフェンスをし、ボックスアウトを徹底する、お互いに激しいディフェンスの攻防でした。最後まで勝敗のわからない一点を争う好ゲームをどのように観戦していたのか？これが、北海道の選手には大事なことです。

現状は受け止めて、さらに上を目指し続けること、そして「いつか、北海道の大学が全国でベスト16、ベスト8、優勝争いをする」そんなチームが絶対に出る。そう思って、日々土台作りを怠らず、また全国の舞台に戻ってきたいと強く思うことがチームに不可欠だと感じています。

最後に、今回このような機会を与えていただき誠にありがとうございました。

今後も、選手育成・北海道強化を徹底的に取り組んで参りたいと思います。